

関西学院大学経済学部チャペル「経済学と聖書」日程

2020年度秋学期・金曜日10:35～11:05 担当:井口 泰

<https://www.facebook.com/groups/265882617772732>

- 9月25日 ルカ12:49 世界を新しくする力
- 10月2日 詩編62:2 危機の中で平安を取戻す
- 10月9日 マタイ5:8 感受性がないと見えない
- 10月16日 ヨハネI2:17 逆境の中で快活に生きる
- 10月23日 コリントII12:9 弱いところに働く力
- 10月30日 黙示録2:4 初めの愛に戻る
(宗教改革記念)
- 11月6日 ルカ13:33 経済不況に働く逆説
(チャペル「経済と人間」)
- 11月13日 フィリピ4:7 戦争と平和と経済
- 11月20日 テサロニケI5:6 祈れないから祈る
- 11月27日 黙示録3:20 期待し待ち続ける勇気
(待降節)
- 12月4日 申命記32:52 望み見る人の奇跡
- 12月11日 コリントI13:1~3 経済と生き方の転換
(「経済と倫理」)
- 12月18日 ルカ21:28 日本経済の復活は可能か
(クリスマス)
- 1月8日 エレミア27:1 コロナ危機は何であったか

讚美歌第2編 103「みたまなる神よ」

作詞 中世ラテン語聖書・マルティン・ルター

曲 15世紀ドイツ語聖歌

1 来たれ聖霊、わが主。われらの心を、
恵もて満たし、燃え立たせたまえ。

み光求める 世界のみ民は、
ここに集められ 主の見栄を歌う。

ハレルヤ、ハレルヤ。

2 聖なる光、わが主。われらの心を、
生ける言葉もて 照らし導いて
主イエスの教えし 正しき信仰
心乱さずに、固くまもらせたまえ。

ハレルヤ、ハレルヤ。

3 聖なる炎、わが主、なぐさめの神よ。
喜びのうちに 主につかえさせて、
われらをとしまく、全ての悩みに
うちかたせたまえ、死の時が来る日まで。
ハレルヤ、ハレルヤ。

EG125

T:Martin Luther M:Enchiridion 1524

1 Komm, Heiliger Geist, Herre Gott, erfüll mit deiner Gnaden
Gut deiner Gläub'gen Herz, Mut und Sinn, dein brennend Lieb
entzünd in ihn'. O Herr, durch deines Lichtes Glanz zum Glauben
du versammelt hast das Volk aus aller Welt Zungen. Das sei dir,
Herr, zu Lob gesungen. Halleluja, Halleluja.

2 Du heiliges Licht, edler Hort, lass leuchten uns des Lebens
Wort und Lehr uns Gott recht erkennen, von Herzen Vater ihn
nennen. O Herr, behüt vor fremder Lehr, dass wir nicht Meister
suchen mehr denn Jesus mit rechtem Glauben und ihm aus ganzer
Macht vertrauen. Halleluja, Halleluja.

3 Du heilige Glut, süßer Trost, nun hilf uns, fröhlich und
getrost in dein Dienst beständig bleiben, die Trübsal uns nicht
wegtreiben. O Herr, durch dein Kraft uns bereit und wehr des
Fleisches Angstlichkeit, dass wir hier ritterlich ringen, durch
Tod und Leben zu dir dringen. Halleluja, Halleluja.

ルカ12：49「わたしは、地上に火を投げ込むために来ました。火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることでしょう。」（新改訳版）

現在も、私たちは新型コロナウイルスの世界的感染（パンデミック）の只中にいます。世界全体の感染者数は9月22日には3千万人（死者数100万人）を超えました。最近では新規発生の8割が新興国ですが、感染防止のためロックダウン（都市封鎖）の長期化に耐えきれない先進国では、北米や欧州で第二次・第三次の感染拡大に突入しました。経済活動の縮小と社会的な影響は、2008年の世界経済危機（リーマンショック）を超え、もはや、1929年の世界恐慌を超える規模に達しました。

聖書は、3000年以上前にさかのぼり、疫病、飢饉、災害と貧困（経済不況）が、人類に襲いかかったことを記録しています。経済学が勃興した18世紀のはるか以前から、聖書は人間社会に繰り返す複合的な危機のメカニズムと意味を語ってきたと言えるのです。

コロナ危機のなかで、キリスト教会は、コロナ危機のなかで、最も弱い人々への配慮の必要性や、社会の分断に対する警告を発していると思います。しかし残念なことに、コロナ危機が起きたメカニズムや人類にとっての意味について聖書を根拠に語られることが、あまりにも乏しいと感じられます。

疫病の発生が、人類にとってどういう意味があるか、聖書に基づいて、ある程度語ることはできるのです。そこで大事なことは、サイエンスが発達した現代と異なり、聖書が物質的な世界と精神的な世界を分離していないということです。経済の危機は、私たちの精神の危機でもあります。先行き不透明と恐怖感で、前向きな思考や行動を起こせないことが、私たちの人生に明らかに影響を与えています。

同時に、聖書の被造物という言葉には二種類あり、動植物だけでなく地球環境を含む用語が存在します。人間と地球環境の間に存在する敵対的な関係が、人類の危機の重要な背景になっています。特に、森林の急速な崩壊が、人類とウイルスの安定した棲み分けを一層難しくしていることもわかっています。

秋の最初のチャペルで、ルカによる福音書の12章49節を取り上げるのは、ある意味では、とてもリスクの高いことに思われます。多くの方は、この聖書の箇所が描く光景をあまりに厳しく残酷と感じ、ひたすら遠ざけてきたのではないかと思います。イエス様は、比喩で語られた言葉とはいえ、この世が悲惨極まりない状態においこまれる切迫感は耐えがたいものです。

もちろん、イエス様が語る火とは、自然界における火でないことは明らかです。しかも、イエス様は、火はまだ燃えていないと嘆いているように感じられます。ここでいう火は、戦争や経済恐慌や革命ではありません。ましてや、人々の熱狂でもありません。

同時に聖書は、古代から神様の霊を火に譬えていることに注意しなければなりません。聖書の語る火は、神様の愛であり、真実を明晰に照らし出す光です。このような光は、真実を求める科学が目指すものに通じるのです。真実を明らかにすることで、私たちは世界の困難や問題を克服する道を示されるのです。そこに、聖書とサイエンスの矛盾はありません。皆さんも、そのような希望のもとで、日本や世界の経済を研究し、経済学を学んでいただきたいと思います。

神様の愛が私たちのなかに働くなら、どん底に沈んだ世界を更新することが、可能になるかもしれません。冷たい恐怖心を暖かい勇気に変えねばなりません。

実は、この聖書の箇所は、平和な生活を奪い、人々の分断をもたらすのとは逆に、私たちの心を暖め、痛み、苦しみや悲しみを取り除き、社会の中に形成された分断を取り除いて、世界を刷新するのです。これは、現状における格差や差別を固定することを有利に感じ、これを維持したい人にとっては、恐ろしいことなのだと思います。

私たちは、本当に必要な人のためならば、自分の不安や苦しさをなんとか克服して、頑張ることができるのです。現在、私たちが危機の時代であることを認識し、あなたのたましいに、神様からいただいた火をともしてください。